

【優秀賞】

かつてない食材価格高騰に対処するため

～おいしい食事提供との両立～

伊豆高原〈ゆうゆうの里〉食事サービス課

○三浦伊織 石黒裕気

【目的】

食事サービス課では、入居者においしい料理を提供できるように日々努力をしているが、昨今の物価上昇に伴い、今まで財団が定める原価率でできていた料理が、20%、30%の値上げが続き、赤字の増大につながってしまった。少しでも収支改善しながら、おいしい食事提供を続けるためにも対策を検討・実行する。

【方法】

- 1、仕入れ価格を減らす
取引業者に対し、代替食品を探したり、生鮮食品を冷凍品に切り替えたり、発注先を変えるなど行い仕入れ価格の減少を試みる。その結果を表にまとめ、年間でいくら削減できるか比較する。
- 2、提供料理の原価を調べる
食材価格変動により、今まで提供できていたが原価を割ってしまっている料理を探るため、小鉢や主菜の価格を調べる。仮に食材比率が悪い料理に関しては材料バランスの変更をして提供。または代替料理を考案し、提供することで支出を減らす。
- 3、最新の食材比率を把握する
仕入れ値と売り上げをパソコンでまとめ、当日までの食材比率を集計する。
- 4、入居者食事アンケートの点数を確認（アンケートの集計数 124）
食材や、材料のバランス、製品の変更をしたことにより、入居者が食事の味や満足度の影響があるか調べるため、毎年行っている食事アンケートの点数を前年度と比べる。
- 5、喫食管理システムの活用
10 日先までの予約数を把握し、仕入れを調整する。
 - ・倫理的配慮
食事アンケートの集計時、本人を特定される恐れのある情報は削除し、数字やコメントのみ集めた。

【結果】

- ・食材価格は、担当者が中心となっておこない、食材変更などと合わせて上半期で 278 万円を削減することができた。
- ・提供料理の価格を調べると、赤字の献立があり、通常料金より高い特別選択食に取り入れることで、原価を抑えることができた。
- ・入居者食事アンケートでは、前年度と比較して、「おいしくない」という意見は 1 件もなかった。また、昼食の小鉢を減らすことによって、食事の量について「多すぎる」という意見が 17%から 9%に減った。
- ・これらの対策の結果、2024 年度食材比は 2023 年度上半期と比較して平均 7%の削減をすることができた。また、食材比率上半期予算の 44.6%に対して 41%と達成することができた。

【考察】

今までの取り組みを通して、課全体が仕入先、仕入れ値、食材原価を意識する事により、過剰な調理や仕入れなど防ぐことができた。

【結論】

今後も値上げは続いていくため、この取り組みは継続しておこなっていきたい。

また削減ばかりに目をむけて、結果として食事の質が低下、献立のレパートリーが狭まらないように、新メニューの開発も引き続き取り組みたい。

【優秀賞】

「看護サマリーの見直し」

神戸〈ゆうゆうの里〉診療所
○木地智恵美 眞弓美智子 本多玲子
松橋明子 田中えり子 岸本加苗

【目的】

看護サマリーとは患者の情報を要約した書類で、入院中に行った治療や処置、看護を簡潔に記録として残すことが目的である。患者が転院などしたり住んでいた居室に戻る時など、受け入れ先に情報を伝達し継続して看護やケアが行えるように作成する。当診療所の記録用紙は古い形式で、記入に時間がかかったり個人により記入の仕方がまちまちであった。簡潔明瞭でスタッフが同じレベルで記入できる用紙の作成に取り組んだ。

【方法】

期間：2024年4月～2024年9月

- ・参考資料を集める
- ・必要項目を検討する
- ・ミーティングを行い診療所独自のサマリー用紙ができるように修正していく

倫理的配慮 本研究には個人を特定できる情報は一切含まれていない

【結果】

転院時及び1か月以上入院した患者は多職種との退院カンファレンスが実施されていたためサマリー用紙を記入していた。1か月以内の退院患者は口頭のみで申し送りをしていたため、送る側は送り忘れがあったりしTEL連絡したり、受ける側はメモをしていたが聞きそびれたことなど後で問い合わせがあったりしていた。入院期間や退院カンファレンスに関係なくサマリー用紙を記入し申し送りをするにより申し送りがスムーズになった。今までの用紙と比べると転院時用、施設内用と2種類共に簡潔明瞭に記録ができ、ADLに関しては分かりやすくなり、また継続するケアが細かく記入できるようになった。

【考察】

退院時の申し送りがスムーズになり、退院後のケアに活用でき情報共有の円滑化ができたのではないかと考えられる。実践した看護ケアの内容を振り返ることもでき、看護ケアの向上につながったと考えられ、今後も継続していきたい。

【結論】

スタッフがほぼ同じレベルで記入できるようになり、受け持ち看護職員がサマリーを責任もって記入する意識付けにもつながった。急に退院が決まった時などは、他のスタッフが協力しサマリーを記入することができた。新しいサマリーは有効活用できていると考えられる。

【優秀賞】

職員の腰痛予防・軽減に自分の学びを活かしたい！

～腰痛予防担当者として今そしてこれからできること～

佐倉〈ゆうゆうの里〉生活サービス課

○鶴岡真弥 河田菜摘

【目的】

自部署である生活サービス課の中には腰痛を訴える人が数名いた。2024 年度腰痛予防担当者に任命されたことをきっかけに、腰痛の発生状況を把握し、その原因や予防策について考えたいと思い、この取り組みを行うこととした。

同時に、入職して 2 年目の私が、現時点で持ち合わせている知識では不足していると自覚があった為、新たな知識を学び、職員として成長を図る機会にしたいと思った。

【方法】

① 仮説「腰痛の原因は筋力・柔軟性の不足ではないか？」の実証

体育大学出身の知識の範囲内で想像し、腰痛が筋力・柔軟性不足が原因だと思われたため、この調査を行った。〈調査期間〉2024 年 4 月～〈対象者〉生活サービス課職員（34 名）

② 調査「腰痛発生原因追及の為の詳細アンケート」の実施

財団全体で実施している腰痛検診以外に、もう少し踏み込んだアンケートを実施した。

〈調査期間〉2024 年 9 月〈対象者〉生活サービス課職員（34 名）

③ 「OODA ループを用いて検証」を試みる（自分の知識の拡大と研究の精度を高める為）
フレームワークの手法を学び、それを用いて検証した。〈実施期間〉2024 年 4 月～

【倫理的配慮】

今回の調査等で得た情報は、個人が特定されないようにし、本研究以外で使用しない。

【結果】

上記①筋力、柔軟性ともに有意差はみられなかった。②腰痛者は肉体的疲労が大きく、ストレス要因も複数であった。睡眠時間も 6 時間以下と短い職員の割合が高かった。③腰痛の原因が複数の場合もあることを知った。情報整理と検証にフレームワークが役立った。

【考察】

筋力、柔軟性がある方が腰痛は起きないと推測していたが、大きな関係がなかった。調査結果から、腰痛者は身体的疲労とストレスを多く感じており、それが原因と推察された（予防として、休息をストレス解消にあてる職員の割合が高かった）。OODA ループを用いたことで、情報を明確にし、スピード感を持って取り組むことができた。

【結論】

自部署の腰痛者の原因は身体的原因やストレスが原因となることが多く、心身のケアの取り組みが大切であるとわかった。仮説の検証の結果、現時点で自分が持つ腰痛の知識では不足していることが分かり、この機会に新たな知識を補うことができたことは良かった。

腰痛予防担当者として今後も継続して学び、その学びを仕事にアウトプットし、職員の腰痛予防、軽減に活かしていきたい。

【優秀賞】

「生活リハ」で元気度アップ

～BI 値で科学的介護を実践～

佐倉〈ゆうゆうの里〉ケアサービス課

○今井桜月 田上真風

齋藤綾子 齋木貴嶺 秋吉恵

【目的】

佐倉〈ゆうゆうの里〉では2022年に常勤の機能訓練指導員の入職をきっかけに機能訓練の個別メニューの中に「生活リハ」を組み入れることとなった。

本研究では、記録管理システム「ケアカルテ」を用いて科学的介護を実践しつつ、介護職員が生活の中でこまめに「生活リハ」を実践することにより、入居者のADLの維持向上を図ることを目的とした。

【方法】

① 調査期間: 2022年4月～2024年3月

② 対象: 佐倉〈ゆうゆうの里〉に居住する全要介護認定者（要支援認定者を除く）

③ 方法:

1. 「生活リハ」の計画

1-1. 計画作成担当者とケアプランの内容を確認

1-2. 機能訓練指導員による運動能力の把握

1-3. 介護職員によるADLの把握

1-4. 入居者の希望の把握

2. 記録管理システム「ケアカルテ」内の訪室介護個別援助計画内に「生活リハ」の計画を記載、実施状況の把握

3. 「生活リハ」実施後の1ヵ月評価、3ヵ月評価

4. 「生活リハ」導入前後のBI値の比較

【倫理的配慮】

本研究にあたっては個人が特定できないようにした。

【結果】

① 食事介助で全介助だった5名のうち4名が一部介助や自立、トイレ介助では介助をしていた10名中2名が介助不要(自立)となる等、入居者のADLが向上した。副次的効果として職員の負担軽減にも繋がった。

② 「生活リハ」導入前の2022年度のBI値は、悪化49.3%、維持42.5%、向上8.2%であったのに対し、「生活リハ」導入後の2023年度は、悪化21.5%、維持58.2%、向上20.3%になった。

【考察】

定期的に評価し、入居者の状態変化に合わせた「生活リハ」内容の調整をこまめにしたことが入居者のADLの維持、向上に繋がった理由であると考えられる。

【結論】

日常生活の中に「生活リハ」を導入したことで、対象の約30%の入居者のBI値が維持向上した。副次的な効果として職員の負担軽減に繋がった。

今後も自立した生活のための支援を継続すると共に、BI値の維持向上を図っていきたい。

【会場賞】

やっぱりお好み焼きは鉄板や！

～個別外出企画～

大阪〈ゆうゆうの里〉生活サービス課

○門田拓也 小田真由 稲田奈津美

【目的】

年齢を重ねるうちに体力の衰えや気力の低下などの理由から外出機会が減っていき、閉じこもり傾向になる入居者がいた。要介護の入居者の外出する機会は、外部病院を受診する時のみという現状があった。

大阪〈ゆうゆうの里〉では入居者の自立・要介護度に合わせた外出行事を随時実施している。しかし、どの外出行事も大人数で時間も半日以上のものであった。要介護の入居者によっては負担に感じ、外出を躊躇する人もいた。

今回、要介護の入居者のニーズに着目し、新たな外出イベントを計画・研究に取り組んだ。

【方法】

- ・期間：2024年5月、2024年6月に実施
 - ・対象：要支援2、要介護1・2の入居者
 - ・内容：個別に聞き取りをし、入居者が望むこと、場所に行く。
- また、個人のADLを元に時間配分や移動方法を考慮し実施する。
企画に参加された入居者4名に聞き取りをおこない、感想をまとめた。
生活面において、何か変化があるか留意した。
※倫理的配慮に関して、本研究は個人情報等を含まない。

【結果】

- Aさん「鉄板で食べるお好み焼きは格別」「いい誕生日プレゼントをもらった」
Bさん「一人で食事をするより、みんなで食事ができて嬉しい」
Cさん「昔よく来た場所。もう来られないと思っていた」
Dさん「以前勤めていた学校を見られて、当時の記憶がよみがえってきた」

【考察】

今回の個別外出企画は入居者に楽しんで参加してもらうことができた。「外出行事は諦めていたけれど職員のサポートのおかげで安心して参加できた」「またいいところに連れて行ってほしい」などの声をもらうことができた。短時間の外出でも、一緒に外出先や内容を検討することで入居者の満足度は高いことがわかった。今回の個別外出企画をきっかけに、参加した入居者が職員の名前を覚えてくれるようになった。

【結論】

今回の個別外出企画は施設内感染症流行や猛暑の影響で、二度の実施でとまっている。要介護の入居者と外出することは身体的負担のリスクを伴うが、外出するのは病院受診する時のみといった現状を打開できるようにしたい。今後もケアマネジャーや入居者担当者や介護保険看護職員と相談しながらイベント実施を計画していきたい。